

原爆文学研究会報

第二二号

原爆文学研究会 二〇〇四年一月

同時異図法的手法 複数の人間が同時に体験した出来事を表象するとき、個々人の物語を構成することによって像を立ち上げるとい

手法がある。原爆の表象においてもこの「同時異図法的手法」とも言うべき手法が用いられることがある。例えば丸木位里・赤松俊子『ピカドン』（一九五〇年八月、ポツダム書店）には、物語の冒頭と結末に「おあばあさん」の物語が置かれるが、中間部には己斐・爆心地・三篠橋・廣瀬町等様々な場所で同時に起こっていた惨劇が描き出されている。永井隆『長崎の鐘』（一九四九年一月、日比谷出版）や原爆投下の前日を描いた井上光晴『明日 一九四五年八月八日。長崎』（一九八二年五月、集英社）等にも用いられているこの手法は、原爆投下という出来事の圧倒的な大きさを示すものとして、独特の効果を生み出している。

小沢節子は丸山位里・俊の連作「原爆の図」の異時同図法的な構成法について 初期「原爆の図」を理解する上で重要なだけでなく、現在の私たちが原爆の問題、戦争の記憶の問題を考える際にも示唆的な意味をもつ（『原爆の図』描かれた 記憶、語られた 絵画』（二〇〇二年七月、岩波書店）と鋭い指摘を行っているが、交錯する複数の視点や時系列の物語よって立ち上がる像は、「実相」や「全体」といったものとは、違う何かを立ち上げているように感じられる。そ

のような視点から多く出版されている被爆者の証言集を読み込むとどのような光景が見えてくるのか、興味深い。（中野和典）

第二二回 原爆文学研究会報告

二〇〇四年九月一日（土）大分県立芸術文化短期大学で開催し



た「第二二回原爆文学研究会」には約二〇名が集いました。木村氏の発表については、ヒロ子が恩人である私に贈るシャツに施した刺繍が原子雲をかたどっていることについての違和感に等について質疑がありました。長野氏の発表については、手話の写像性と被爆体験の語り方やオーラル・ヒストリーの可能性等についての質疑がありました。

原爆児童文学のアクチュアリティー

木村 功

本報告では、現在小学校の国語教科書（教育出版）に採録されている「ヒロシマの歌」（一九六〇年）を対象に、原爆体験の記憶・物語化の問題を考察するとともに、戦争・原爆を扱う戦争児童文学の現在についても私見を述べた。

実際に被爆地広島に入って救助活動に従事した経験をもつ今西祐行（一九三三）は、戦後「原子雲のイニシアル」（朝日新聞ジュニア版）一九五八年八月七日）を発表し、その後現在見るような「ヒロシマのうた」（国分一太郎編『日本クオレ 愛と真心の物語』小峰書店、一九六〇年二月一〇日）に改稿している。

「ヒロシマの歌」の発表当時日本は、高度経済成長期を目前にした戦後復興の只中であつたが、その一方で冷戦構造下の緊張の渦中にもあつた。国内では再軍備化に舵がきられ、新安保条約が締結された。またヒキコ環礁で行われた水爆実験と第五福龍丸の被爆事故は、原爆を体験した国内に衝撃を走らせることになった。国民の脳裡を再び戦争の悪夢が去来する中で、今西をはじめとする原爆を体験した児童文学の作家達が、原爆を題材に創作活動を開始したのであつた。そこにはまた、二〇年近い時間の経過の中で、被爆地の形跡が消去されたり観光地化されたり、また悲惨な体験を証言する人間が

亡くなっていったことで、戦争・原爆の記憶を「物語」という文化装置に委ねざるを得なくなった現状がある。

「ヒロシマの歌」が関わっているのは、そのような時代状況であつた。今西の体験を投影した稲毛という主人公が被爆地で赤ん坊を救助し、十五年後に一人前に成長した少女と再会するこの作品は、悲惨な原爆からの「復興」というテーマを提出している。しかし、この「復興」の内実については、住田勝が「広島復興」という名の篡奪であると指摘しているように、当事者である被爆者を切り捨てる側面があつた。ヒロシマの「復興」の両義性を商量した時、「ヒロシマの歌」の世界像は、「復興」とヒロ子（ヒロシマの子どもの意）の成長を結びつけるあまり、ヒロシマの現実よりも理想のヒロシマ像を描き出してしまつているといえるだろう。「復興」のイメージはカタルシスとなつて読者（児童）の原爆に対する惨状・非人道性の認識を上書きし、ヒロシマを記憶し問題視し続ける態度を阻害することになるのである。

そして戦争・原爆児童文学は、一九九〇年代に宮川健郎によつて物語内容の形骸化が問題視されるようになった。ルーチン化した戦争・原爆の「物語」が、ついに読者の想像力を喚起しなくなったのである。我々は、日本の過去の戦争に目を向けるだけでなく、現在の戦争にも子ども達の目を向けさせ、アクチュアルな問題意識を育てる必要があるだろう。

原爆をめぐる表象の意味は、常に「現在」を経由した再検討によることでは見出されない。

被爆者・ろうあ者・言語

長野 秀樹

昨年八月九日の長崎原爆死没者慰霊平和記念式典における、被爆者代表「平和への誓い」は、ろうあ者である山崎榮子氏によって述べられた。

ところが、当日のNHKの生中継では、山崎氏の手話を伝えるために、上半身を写し出していた映像が、ロングショットに切り替えられたり、顔のアップに切り替えられるということが起こった。このような映像は、手話通訳の音声を通じて、山崎氏の「平和への誓い」を聞いていた健聴者には、何ら問題ないショットであろうが、テレビを通じて映像を見るだけで、音声を聞き取ることが不可能なろうあ者は、手話が途切れてしまい、理解不能に陥ったはずである。

こうしたことが起きた原因としては、手話がこれだけ普及しても、それは音声言語を手話に通訳するという機会が圧倒的に多く、ろうあ者が手話を使って情報を発信する機会、またはそうした場面が放送されるといった機会が圧倒的に少ないということが考えられる。こうした偏りは現在のろうあ者の社会的状況をよく表している。

そうした中で、山崎氏が「平和への誓い」を手話で述べたことは、多くのろうあ者に共感を呼んだ。特にその中でも、手話教育と口話教育の狭間でとまどっている、学齢期にある若いろうあ者に自分た

ちの将来像の一つとして大きな希望と自信を与えたと見えよう。

また、山崎氏を始め、長崎県で被爆したろうあ者の体験は全国手話通訳問題研究会長崎支部によって、聞き取りと文章化が行われている。その成果は『手よ語れ』、(長崎県ろうあ福祉協会・全通県長崎支部、昭和六一、八)『原爆を見た聞こえない人々』(文理閣、平成七、三)という二冊の本に纏められている。原爆に限定せずとも、たとえば南京大虐殺、あるいは歴史上の事件について、オーラルヒストリーの持つ意味は、歴史学の方面から、様々に考察がなされている。では、文学作品とこうした証言の関係をどのように考えればいいのかというと、私には判然としない。

歴史の再現、あるいは再構成という目的のために、証言はきわめて有効な方法であるが、個別の一回だけの体験を、歴史に集約してしまう危険がそうした行為には常につきまとうであろう。しかし、沖縄、長崎、広島などの語り部たちの証言が、次の世代への経験の継承という意味で、果たしている役割は依然として大きい。果たして、文学作品は証言という経験を中心とする言説を越えるだけの力を、長崎において獲得しているのだろうか。

手話による証言をオーラルヒストリーというのは皮肉でもあるが、聞き取りによる文章化ではない、ビデオ録画によって直接、彼女の八月九日の証言を見ながら、判然としないままに、証言を越える文学作品の可能性について考えてみる。

彙報

第二回原爆文学研究会

日時 二〇〇四年九月一日(土) 一四時より

会場 大分県立芸術文化短期大学 人文棟二階 会議室

内容 研究発表

原爆児童文学のアクチュアリティー

木村 功

被爆者・ろっあ者・言語

長野 秀樹

広島文学館のご紹介



第二回原爆文学研究会において、成定薫氏(広島大学)より、内容更新中の「広島文学館」についてのプレゼンテーションが行われました。この文学館は、Web上の仮想文学館で、パソコンを使って、どこからでも閲覧可能です。原田民喜の「手帳」の画像等をはじめとする「文学資料データベース」の他、「広島ヒロシマの文学を語る」(エッセイ、論文)や「峠三吉没後五〇年の会」についての情報などが閲覧できますので、ぜひご覧下さい。

。「広島文学館」URL <http://home.hiroshima-u.ac.jp/bngkn/index.html>

編集後記

九月の研究会の翌日、湯布院に寄った。本会の呼びかけ人である故・花田俊典氏が命名した温泉が、由布院の美術館にあると聞いたことがあったので行ってみようと考えたのだ。「由布院の美術館」の中にあるらしいという大雑把な情報だけを頼りに小さな美術館が乱立する現地に行ったため、悪天候の中を一時間ほどさ迷い歩く羽目になった。目当ての温泉が他ならぬ「湯布院美術館」にあるということがわかり、現在は足湯となったその温泉に両足を浸したときには、生き返る心地だった。名は「ともだち湯」という。「湯(ゆ)」には、沖縄の言葉で友達関係を示す「結(ゆ)」の意味も込められているという説明書きがある。目を閉じると温かい思いがこみ上げてきた。原爆文学研究会は、来月で三周年を迎える。馴れ合わず、しかし、心の通う会にしてゆきたい。(N)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒811 6520 福岡市中央区六本松4 2 1

九州大学大学院比較社会文化研究院 石川巧研究室内

tel/fax 092-726-4595 e-mail ishikawa@scs.kyushu-u.ac.jp

URL <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/~th/genbunken/index.htm>